

被爆2世・3世と、そして未来世代の健康を守るために

あなたのことを聞かせてください

被爆2世・3世健康調査アンケート



2020年
京都「被爆2世・3世の会」

〒604-8854 京都市中京区壬生仙念町30-2 ラポール京都5階 京都原水協気付
TEL: 075-811-3203 FAX: 075-811-3213 HP: <http://aogiri2-3.jp>

被爆2世・3世健康調査アンケートについて — お願い

被爆2世・3世のみなさま。京都「被爆2世・3世の会」の第2回目の被爆2世3世健康調査アンケートを行いたいと思います。ぜひご協力ください。

私たちはこの調査で、私たち被爆2世・3世の身体に起こっていることの把握をすすめ、原爆放射線による被害の真相、特に遺伝的影響の実相に少しでも近づくとともに、私たちの持つ漠然とした不安に対してもより確かな答えを導き出し、私たち自身と子どもたち、孫たち、そして未来世代の健康を守ることに繋がりたいと思っています。

これまで被爆被害の真相、とりわけ遺伝的影響を明らかにするこのような調査はほとんど行われてきておらず、資料が大変少ないのが実情です。

このため私たちが第1回目に行った調査（2015年）結果とともに、これまでの文献の中から「被爆2世に起こったこと」として記録されている数少ない論稿やデータを集め、被爆1世の身体に現に起きたことを参照しつつ、私たちに起こっていることの把握につとめようと思います。

そのため幾つかの文献や調査を参考にしつつ、質問を作成し、お答えしていただきながら進めていきたいと思っています。

ただこの作業は、場合によっては苦しさを伴うかもしれません。なぜかという和被爆2世の身体に起こってきたと思われることを様々に読み、それぞれの体験を振り返っていく中で、過去の苦しみやそれにまつわる悲しみなどがよみがえってくることもありうるからです。

実際、これまでの私たちの調査では、子どものころ体調が思わしくなく、鼻血をよく出したり、怪我が治りにくく、化膿しウミが出る状態からなかなかかさぶたができなくて辛い思いをしたり、喘息もちで苦しんだことなどが多数報告されています。そしてそれにまつわるさまざまな苦労を思い出すことにもつながります。

例えばある被爆2世は「怪我がなかなか治らないのはとても辛い体験だった。そのこと自身を思い出すのも辛い、同時に子どもの時にその苦しみの中でついつい母親を責めてしまった。今になって謝りたいと思うのだが母はもういない。そういう辛い思いで胸がいっぱいになった」と語られ、「このアンケートがそうした辛さやトラウマを呼び起こすことになるのではない心配だ」と語られました。

その点で私たちの作成した質問は、多分にデリケートな点に踏み込んだものとなっており、場合によっては辛いものになりうる可能性があるかと自覚しています。

この点をどうするかの話し合いを重ねる中で、私たちは今回のこのアンケートを可能な限り対面で行うこととしました。アンケートにご協力いただいた方が辛さを感じ

られた時、私たちが可能な対応をできるようにするためです。

その点で、アンケートに応じてくださる方は、どうか設問に答えにくい場合は遠慮なくそうご回答くださるよう、あらかじめお伝えしたいと思います。同じように、書かれていることを読むのが辛い場合はどうぞスキップして次に進んでいただければと思います。

また辛さや悲しみが呼び起された場合、差支えなければそれを私たちに伝えていただきたいと思いますし、遠方におられて、どうしても対面でのお答えをいただけない場合は、可能でしたらそれを書き記していただければと思います。その場合、必ず先んじてお返事を差し上げます。

これらを通じて思うのは、本来、被爆2世3世に対する調査は、そうした辛さも含め、カウンセリングの側面も合わせ持つ形で公的に行われなければならないものでもあるということです。被爆者、被爆2世・3世の痛みは心身ともに癒されるべきものとしてあるからです。

その点で私たちのこのアンケートも、そうした心身の癒しにもつながるもの、私たちの中にある「辛さ」のシェアにもなればとも思っています。同時に私たちが、被爆2世・3世である自覚を深め、いわばそれを「選び取っていく」契機にもなればと思います。

被爆被害の問題は障害者差別の問題にもつながっています。実際、被爆後に被爆者の中で少なくない方が「障害者が生まれる」からと子どもをつくることを諦めたという話もあります。しかし先日、私たちの会で被爆体験の証言をお聞きした被爆者・切明千枝子さんは、「ある医師から『その考えこそが差別だ！』と叱られて目が覚め、子どもをつくる決意をした。そして今は子どもたち、孫たちに囲まれていて幸せだ」と語ってくださいました。(巻末に資料添付)

私たちも、1世、2世が私たちを産み落としてくれたからこそこの世に存在しています。そのことに深く感謝し、2世、3世として誇り高く生きていくためにもこの調査をみなさんと一緒に進めたいと思います。どうかこの点をご理解いただき、アンケートにお答えくださるよう心からお願いいたします。



2020年4月
京都「被爆2世3世の会」

アンケート調査の進め方

■ 森川聖詩著『核なき未来へ』を参考にしながら

2018年12月10日、神奈川県在住の被爆二世・森川聖詩さんが著書『核なき未来へ—被爆二世からのメッセージ』（現代書館）を刊行されました。この世に生を受けて以来、一人の被爆二世がどのような健康問題を体験しながらこの半生を生きてきたのか、詳細に綴られた書物です。

この『核なき未来へ』の中から森川さんの身に起こってきた具体的なことを抜き出し引用しました。これを読みながら、ご自分やご家族に同じような体験がある場合に、当該箇所に記しをつけていただきながら読み進めて下さい。

森川さんが書かれていることは、すでにわたしたち京都「被爆2世・3世の会」の感想討論会で「自分が小さい時にまったく同じことを経験した。トラウマが蘇り辛くて途中で読むのを止め、時間が経ってから読み通した」という感想が寄せられるなどしました。多くの仲間が同じ体験をしているのではないかと思います。



■ 参考となる文献・資料を参照しながら

被爆二世の健康についての調査・資料は数少ないのが実情ですが、1970年代にいくつかの体験記やデータが公表されています。ここに示されている被爆二世の健康障害の事例を紹介します。

被爆者のみなさんの特徴的な健康障害の資料も紹介し、参照していきます。具体的には被爆者援護法において「健康管理手当」の給付対象になっている疾病、1979年出版の『広島・長崎の原爆災害』（広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会編集・岩波書店・1979年）における被爆者調査結果です。また、京都「被爆2世・3世の会」が取り組んできた被爆者の被爆体験の聴き取りからも特徴的な事例を抜き出し、参照することにしました。

被爆2世にはこの世に生を受けることのできなかつた「死産、流産も多かった」と語られている例もあります。このことについてもみなさんにお答えいただくようになっています。

以上の上であらためてそれぞれのご自身やご家族にあったことを振り返っていただこうと思います。

以上、ハードワークになりますが、どうかよろしくお願いします！

0、最初にあなたの個人情報

いよいよアンケート本体に入ります。初めに個人情報をお聞きします。下線部は可能なもののみお書きください。そうでないものは当該箇所に○をつけてください。性別についてはご自分が思うようにお書きください。

生年月日 _____

性別 _____

自分は被爆2世である、被爆3世である

2世の場合

父親が被爆

母親が被爆

父母の被爆について知っていることをお書きください

とくに被爆地点、爆心地からの距離が分かる場合は詳しく明記してください

3世の場合

父親が2世

母親が2世

祖父母の被爆について知っていることをお書きください

とくに被爆地点、爆心地からの距離が分かる場合は詳しく明記してください

なお、今後の資料配布などのため氏名・ご住所なども差し支えなければ教えていただきたいですが、まずはアンケートを進められてから考えていただければと思います。このためアンケートの最後に記入欄を設けてあります。

1、森川聖詩さんの著書『核なき未来から』

以下、森川聖詩さんの著書からの抜粋です。なお()内は要約部分です。同じ体験のある方は当該箇所に○ないしアンダーラインを引いて下さい。

- 「私が生まれたときの体重は2700グラムで、幼少のころは、よく原因不明の発熱で何度も死線をさまよった、と聞いている」
- 「(小学生のとき)夏の思い出といえば、暑さでいつも体調をくずし、お腹をこわして下痢をし、ぐったりして、昼間は何もすることができず、ひたすら横になって休んでいたこと、ただそれだけである」
- 「その他の季節も物心ついたころから常に何かしらの体の不調を感じていた。日々感じるたえようのない体のだるさ、脱力感と疲れやすさが我が身を襲っていた」
- 「風邪をひくと必ずといってよいほどこじれて、急性気管支炎を併発し、高熱とひどい咳や痰をとまなう症状にいつも悩まされた」
- 「外で歩いたり、走ったりなどして、階段を踏み外したり、距離感の目測を誤り、つまずいて転んでケガをすることが多かった。後から振り返ると、その主な原因は、私が「交代制外斜視」だったことにあるようである」
- 「ケガをすると、少々のかすり傷のようなものであっても、傷口がなかなか治らず化膿して、白い膿みがたまり、炎症を起こすことが多く、そのたびに病院にかよっていた」
- (小さい時からヴァイオリンを習っていたが、5年生になり)「ヴァイオリンの練習をしていて、弦を押さえる方の手である左手中指と薬指に、痛みを感じるようになった。次第に、第二関節が腫れあがり、中指と薬指をそろえることができないくらいまでになっていった。指腱鞘炎(関節炎)・通称ばね指だった」(ヴァイオリンをやめることになってしまった)
- (中学・高校と体力があがり、剣道部で活躍できるようにまでなり、2年生の時には部長になったが)「2年生の夏ごろまた体に故障が生じた。左手中指・薬指腱鞘炎の再発だった。・・・とても練習することも、まして試合に出場することもできなくなってしまった」
- (その後、受験勉強に打ち込み、翌年秋には模試での成績もどんどんあがった)「またしても体を異変が襲った。机に向かっていたときに、蛍光灯の光や本や白いノートからの光の反射がまぶしく感じたり、目がくらむような感じがするようになり、その症状が進むと目と眉間に鋭利なものが突き刺さるような激痛を伴うようになった。そしてついには、眉間、鼻、ほおと口から後頭部へと針金でも通したかのようなたとえようもない鈍痛も走り出した」
- 「物心ついたころから悩まされていた数々の不調のなかで、日常的であったもの

のひとつが、頻繁な腹痛を伴う下痢であった(この下痢は日常茶飯事である。お腹の弱い体質は成長しても変わることなく、今に至っている)。

学校の授業が終わり、下校、帰宅途中に急に差し込むような腹痛と便意を催し、30分前後の自宅までの帰り道に我慢しきれず、失禁してしまうこともしばしばあった」

- 「大学入学後も、受験勉強中に発症した顔面痛はいつこうに軽快しないばかりか、疲労や睡眠不足、あるいは多湿の日などの痛みは尋常でなく、顔をしかめたくなるほどだった。この顔面痛は、今もなお完治していない」
- 「それまでに経験したことのなかったような新たな原因不明の症状に次々に見舞われた。突然めまいがしたり、目がかすんで焦点が合わなくなったり、朝起きてから1～2時間、ティッシュペーパー半箱分をも要するほどひどい鼻水が止まらない症状にも悩まされた。時を同じくしていくら手を洗っても数分経つと手が油でも塗ったようにべたべたになった」
- (大学に入って断食を経験。またクロレラを飲用するようになり体調がやや改善。以来、クロレラの愛飲を続けている)
- 「体調も改善されてきて、ようやく精神的にも落ち着いてきてはいた。ただ顔面痛みは相変わらずであったため、今度はその対策を考えた。顔面痛が進行し、メガネをかけている時の顔面、眉間、鼻、耳への重みや圧力や痛みも感じるようになっていたことなどから、コンタクトレンズ着用により切り替えての痛みの軽減を期待した。しかし私は角膜が弱いためか、コンタクトレンズは、ハードレンズだけでなくソフトレンズさえ、強い異物感や充血を伴う痛みを感じるため、着用は無理な状況だった」「その後、一時期より幾分か痛みが和らいだことと、この痛み慣れたことで、この顔面痛という原因不明とされる厄介な持病を抱えながら、生きていくこととなった」
- (留学を経て就職。病院事務勤務の後、郵政労働者に)
「中腰姿勢の多い肉体労働や16時間勤務(16時半頃～翌朝9時半頃までの勤務。夜半1時頃～3時半頃の2時間半程度の仮眠休憩時間)を経験してみて・・・健康状態に様々な支障が現れた。不規則な生活のリズムから、自律神経の乱れによると思われる下痢や腹痛など胃腸症状や頭痛、持病の顔面痛の悪化、明け方の作業中に起こる不整脈やこれに伴うめまいや額などの脂汗、そして腰痛や内痔核が悪化し、1981年秋には内痔核切除の手術をしなければならないほどだった」
- (その後、結婚)
「結婚して2年目、妻の胎内に新しい命が宿った。私にとっては、自分が結婚できたことさえ、とても幸運に思っていたので、職場にいて、妻から電話で知らせを聞いたときは天にも昇る心地で、その日は終業とともに跳ねるようにして帰宅

し、お祝いしたのが思い出される」「でも、これらは束の間の喜びだった。妊娠2か月、3か月、と月日が経過しても、胎内で成長しないままであり、いわば、この世に生まれ出て存命できるだけの生命力のない胎児であることがわかった。つまり、人工妊娠中絶以外の選択肢は、残念ながらなかったのである」

- (趣味でジャズボーカルをはじめたが声が枯れはじめ出なくなった(2000年ごろから徐々に)
「営業中や仕事が終わって夕方、あるいは歌を歌っているときなどに声がかすれることがあった。当初は、翌朝には症状が消えていたのでそれほど気にとめなかったが、次第に常態化、慢性化していった。そしてある朝、目覚めるとまったく声が出ない。仕事を休み、耳鼻咽喉科を訪れたところ、慢性喉頭炎との診断だった」
- 「私は、そのころ、かねてからの副鼻腔炎が悪化し、後鼻漏とって、蓄膿症のうみが鼻から喉に常時垂れてくるしつこい症状に悩まされていた。この後鼻漏が、慢性喉頭炎の大半の原因だと聞いた」
- 「私が17歳のときに顔面痛を発症してから、それが消える日は、1日たりともなかった。そしてこの顔面痛は、郵便課の16時間勤務からはずれて以降、ほんの一時、わずかに軽快したかに見えたが、それをつかの間、30歳代後半にさしかかったあたりからまた、ますますひどくなっていた。とくに疲れがたまっているときや睡眠不足のとき、湿度の高い日などには、顔の頬や口元に針金をねじ込まれたような痛みで強い苦痛を伴った。この顔面痛は、目の疲れとも関連しているように感じられた。さらに顔面痛が進行していたことにより、軽量の眼鏡をかけた時のわずかな重みでさえも、鼻や耳に強い圧痛を感じていた」
- 「60歳になり・・・体調不良や症状も、以前にもまして増えてきている。
- 子どものころ、少々の傷でも化膿しやすかった兆候が再燃してきた。ほんのわずかなひっかき傷やすり傷などでも、放置しておく、数日後にはピンク色に腫れ、炎症を起こし、化膿して、痛痒くなり、膿が出るようになった」
- 「60歳になった年・・・花粉症と診断された」
- 「2014年秋に風邪をひいたとき・・・(内科医師の診断では) 気管支喘息だという」「突如として3分から、ひどいときには10分前後せきこむ発作に見舞われるようになった」
- 「2015年ごろから、手足が急に冷えるようになった・・・とくに、午前中に心臓の鼓動がいきなり早くなったり、脈が飛ぶような感覚に襲われたりすることもあった。もともとあった頻尿傾向や残尿感もひどくなり、就寝中、トイレに起きる回数も以前より格段に増えた。自律神経失調の症状だった」
- 「ちょうどこのころから、足の冷えとともに足底の妙な違和感(しびれた感覚)も出てくるようになり、それがしだいにひどくなっていった。(整形外科医師の診断

2、1970年代の文献から

被爆二世の健康問題について1970年代に刊行されているいくつかの文献では、被爆二世の身に起こったこととして、白血病で仲間が亡くなったり、入院しているなどの事例と共に以下のようなことが記述されています。

- 「子どものころ母親と同じような寝たり起きたりの生活をしていた」
- 「体に赤紫の斑点があらわれたり消えたりする」
- 「中学生になってから活字をみると目がまわるようになった」
- 「中学生で学業がつらくなった」
- 「内臓が弱い」
- 「労働がつらいため、離職せねばならなかった」
- 「傷を縫ったあとが治らずケロイドのような感じになった」
- 「夏になると辛くて寝ていた」
- 「周りの子どもたちより身長が著しく低かった」
- 「冬が苦手ですいつも風邪をこじらせていた」
- 「給食が食べきれずに辛かった」
- 「微熱、頭痛、胃の痛み、手足の痛み、めまい、吐き気に悩まされた」
- 「体のだるさが2年も続いた」
- 「全身が痛んだり、関節がおかしくなって歩けないときがあった」
- 「心臓が弱り息切れがした」
- 「食べたものを吐いてしまう」

問3 ここにある記述のような症状について覚えのある方はおられるでしょうか。その場合に当該箇所には○をしてください。ご両親、ご兄弟姉妹、お子さんお孫さんにそのような症状があった場合は当該箇所には誰についてかを示して△をしてください。

問4 上記の内容について思いつくことを自由筆記でお書きください。

3、被爆者援護法によって「健康管理手当」の対象となっている障害と病名

被爆者援護法に基づいて被爆者に「健康管理手当」が支給されていますが、その場合以下の11種類の疾病にかかっていることが条件となっています。その障害とおもな病名を列挙します。なお東京都と神奈川県では自治体独自の施策で被爆2世と認定された方にも同じ障害と病気について医療援助を受けられることになっています。

- 1 造血機能障害
再生不良性貧血、血小板減少症、白血球減少症、
鉄欠乏性貧血 その他の貧血症
- 2 肝臓機能障害
アルコール性、ウイルス性を除く慢性肝炎・肝硬変など
- 3 細胞増殖機能障害
すべての部位の悪性新生物（がん・白血病など）
脳腫瘍だけは良性腫瘍でも認められる場合あり
- 4 内分泌腺機能障害
糖尿病、甲状腺機能低下症、甲状腺腫、甲状腺機能亢進症
- 5 脳血管障害
脳出血、くも膜下出血、脳梗塞など
- 6 循環器機能障害
高血圧性心疾患、慢性虚血性心疾患 狭心症、心筋梗塞など
- 7 腎臓機能障害
慢性腎炎、ネフローゼ症候群など
- 8 水晶体混濁による視機能障害
先天性・糖尿病性を除く白内障のみ
- 9 呼吸器機能障害
肺気腫、肺繊維症、慢性間質性肺炎など
- 10 運動器機能障害
変形性関節症、変形性脊椎症、骨粗鬆症など
- 11 潰瘍による消化器機能障害
胃潰瘍、十二指腸潰瘍、潰瘍性大腸炎など

なお5で紹介する『広島・長崎の原爆災害』の中でそれぞれの病の解説がなされていたので記しておきます。（第9章 後障害および遺伝的影響）から

白血病

がん化した白血病細胞が増殖、正常な白血球、赤血球、血小板が減少する
多発性骨髄腫

白血球のリンパ球の中の形質細胞(抗体などを作る)ががん化し増殖する

4 『広島・長崎の原爆災害』より

1979年に『広島・長崎の原爆災害』（広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会・岩波書店）が出版されました。この中で明らかにされている被爆者に身に起こったことをピックアップします。

① 『同書』第8章 初期の身体傷害—急性期原子爆弾傷から

○『同書』で指摘されている人体の中で放射線傷害を受けやすい箇所について引用しておきます。なお*以下は「2世・3世の会」の補足です。

「リンパ球」

「幼若な血液細胞(骨髄内の血球母細胞*造血幹細胞から分化する)」

「腸の粘膜上皮細胞」

「睾丸の精祖細胞(*精子をつくる精細胞の前駆体)」

「卵巣の濾胞細胞(*卵巣を包み込んでいる細胞)」

「膀胱の粘膜上皮細胞」

「食道の粘膜上皮細胞」

「胃の粘膜上皮細胞」

「口腔や咽頭の粘膜上皮細胞」

「皮膚の表皮細胞」

「毛根」

「皮脂腺(*皮膚の内部にある小さな腺)」

「目のレンズの小視細胞」

(同書p76~77)



○『同書』はまず陸軍が分類した第1期（8月6日から17日）、第2期（8月19日から9月上旬まで）、第3期（9月上旬から9月下旬まで）の被害のうち、1、2期について抜き書きしています。

第1期の症状

「悪心(*おしん=嘔吐の前のむかつき)」

「嘔吐」

「煩喝(*口が渴き水を飲みたがる)」

「食思不振」

「全身倦怠」

「発熱」

「下痢(*水様便、粘血下痢便)」

(同書p77)

第2期の症状

- 「脱毛」
- 「出血性素因(*出血しやすい状態)」
- 「皮膚出血斑」
- 「歯根出血」
- 「鼻血」
- 「下血」
- 「血尿」
- 「喀血」
- 「歯根炎、扁桃腺炎、口腔咽頭炎」 p78
- 「赤血球、白血球、血小板の減少を伴う」 p85

この時期にたくさんの方が亡くなっていきました。いずれも臓器などに致命的な打撃を受けましたが、ここでは当時、記述された症状のみが列挙されています。(なおここでは熱線によるケロイドなどの熱傷の影響は割愛しています)

○『同書』はこれを踏まえつつ、被爆から120日目までの細かい分析を行い、総じて血球やリンパ球の減少が起こり、それらが命を縮めることに直結していたことを明らかにしています。ここから放射線被曝によって最もよく生じるのは造血組織やリンパ組織の傷害だということです。この点を踏まえてご自身やご家族の血液やリンパ節などをめぐる病を振り返ってください。

問7 ここにある記述のような症状について覚えのある方はおられるでしょうか。その場合に当該箇所に○をしてください。ご両親、ご兄弟姉妹、お子さん、お孫さんにそのような症状があった場合は当該箇所に誰についてかを示して△をしてください。

問8 上記の内容について思いつくことを自由筆記でお書きください。

②『同書』9章4節「被爆婦人にみられた後障害」から

○同書は被爆後、多くの女性が無月経になったことをとりあげています。急性放射能症状のあった人では69%、なかった人でも33.7%が経験しました。

また被爆後、閉経時期が数年早まりました。この他の症状として「月経不順、月経困難、不正性器出血、稀発月経、不感症、広島病と呼ばれた自律神経失調症状」があげられています。

問9 ここにある記述のような症状について覚えのある方はおられるでしょうか。その場合に当該箇所に○をしてください。ご両親、ご兄弟姉妹、お子さん、お孫さんにそのような症状があった場合は当該箇所に誰についてかを示して△をしてください。

問10 上記の内容について思いつくことを自由筆記でお書きください。

③『同書』9章6節「成長と発育の障害」7節「加齢と寿命」より

○同書は被爆した子どもの調査において平均身長・体重が非被爆児童よりも低かったことを導き出しています。歯のエナメル質形成不全も被爆児童の方が多い傾向にありました。

1966～68年の調査によれば、被爆時0～18歳だった広島・長崎の被爆者3200人の調査で被爆時0～55歳で推定で100ラド以上浴びた人は広島の男性で4.4センチ、女性で2.5センチ、平均身長よりも低かった。なお被爆の後障害の一つとして老化の促進があげられているが調査が1950年から始まっていることもあって十分には分からないとされています。

問11 ここにある記述のような症状について覚えのある方はおられるでしょうか。その場合に当該箇所には○をしてください。ご両親、ご兄弟姉妹、お子さん、お孫さんにそのような症状があった場合は当該箇所には誰についてかを示して△をしてください。

問12 上記の内容について思いつくことを自由筆記でお書きください。

④『同書』9章8節「精神神経系の障害」から

○同書は血液の病気を含む被爆者が訴えたさまざまな体調不良をとりあげ、被曝との因果関係が不明なためとりあえずは「精神神経の障害」にまとめています。症例が多岐にわたっており大変参考になるので書き記します。

消化器についての訴え

- 常習下痢
- 常習便秘
- 常習的な腹痛
- その他の胃腸障害
- 食中毒を起こしやすい
- 悪心・嘔吐
- 胃痙攣
- 胃腸潰瘍

循環器についての訴え

- 手足の冷え
- ほてり
- チアノーゼ
- 水に浸けたり雨にあうと夏でも痺れ手足の静脈の怒張が起こる
- 寒冷にあっても同様の変化が起こる
- 働くと下肢ばかりでなく顔や手足にかけて浮腫が生じやすい
- ことに熱傷の傷痕の周囲に蕁麻疹が出やすくなった

体温についての訴え

発汗過多(半身のみの場合もあり)になった
汗が出にくくなった
1年に1、2回38～39度の高熱を発するがその際熱感を伴わない
疲れると微熱が出る
手から熱気を生じ、ついには全身におよぶ
著しく寒がり・暑がりになった

出血性傾向

歯根出血や下肢の溢血斑(*いっけつはん 毛細血管の破たんによって生じる小豆大以下の小出血)がしやすい
ちょっと出血しても紫斑をのこす

罹患・環境不堪性傾向

気候の変化に耐えず夏季・冬季を問わず風邪をひきやすくなった
暑熱・日射・寒気に堪えにくく気候の変わり目につよい不快を訴える

全身疲労性

手足がだるく他人の5～6倍休む
1日中仕事をすると2～3日休むようになる
身体の置き場がないほどの状態でとくに夏季・あるいは日向で著しい

健忘症

「バカになった」と言われるほど記憶力がなくなった
何もわからぬ

眩暈・頭重・頭痛

気候の変わり目や日射でつよくなる

精神作業不堪

根気がなくなった
能率が悪くなった
作業意欲喪失

精神ショック不堪

音に脅え他人のくしゃみにも驚く
閃光に脅え電灯の点滅も意にまかせぬ
風に対する恐怖症がのこる

- 疲れやすくて体が弱い。小学中学と続いた。高校で元気になったが社会に出て就職してからまた疲れやすい体に。仕事に行こうと思うが起きられない。
- 35歳ごろから体がとてもだるく寒気を感じ汗をかくようになった。
- ひどいめまい、首がおかしくムチウチのような痛みが走った
- 19歳のときに働いていてある日突然四肢麻痺(しこまひ)に。
- 運転中にめまい。低血圧。
- 両足裏に膿が出る病気で立てない。足の裏に水ぶくれ、膿がたまりつぶれたらビチャビチャになって乾燥したら次の水ぶくれが。車椅子生活。
- どれだけ防水しても少しの水気、お湯ではれるため、風呂にも入れず。
- 腸も悪く、痙攣(けいれん)、腸ねん転みみたいなこともあった。
- 子どものころから風邪をひきやすく、体も弱く、熱もよく出て、疲れやすくなっていた。歯茎に骨膜炎を発症して手術もした。
- 頭痛が50年も続いているときどき強い眩暈がする
- 白血球数がものすごく少なくて、夏はしんどくて本当に辛かった。
- 朝礼などで立ち続けることができなかった。
- 生理が普通ではなくものすごくきつかった。期間も長く、前後は腰痛がひどかった。

○子ども(2世)におこったこと

- 長男が生後10日で栄養失調で死亡。
- 長女が生まれながらにして顔に血管腫ができていて、痣がずんずん大きくなって、胸にも背中にもできた。よく発熱し都度ひきつけ起こして3回ぐらい救急搬送された。
- 長男は幼稚園の入園式の日、突然足が痛い、歩けないと言い出した。翌日になると手が痛い肩が痛いといろんな関節が痛くなってくる。1週間後に首から下の全身に紫の斑点が出て来て、頭にはこぶのようなものができていて頭が痛い。紫斑病と診断。
- 長男が健診で白血球が多すぎると診断された。その後も目眩(めまい)でよく倒れたりした。
- 長男が生後2か月で死亡。
- 長男は心臓が悪かった。4つあるはずの心室が二つしかなく5か月目に亡くなった。
- 長女は産み月になっても普通の人6ヶ月位の成長ぶりではなかった。予定日より3週間も早く出産。髪の毛の赤い小さな赤ちゃんだった。娘は幼稚園になっても髪は黒くならず、大きくなるに従ってだんだん赤くなっていきトウモロコシの毛のように真っ赤になっていった。
- その長女が結婚し妊娠した時、妊娠6ヶ月に入った頃、流産しかけるので毎日注射をして何とかもたせた。8ヶ月に医師から「これ以上我慢したら母体が持たな

参考資料 広島の被爆者・切明千枝子さんの被爆体験記から（抜粋）

■被爆2世・3世のみなさんには胸を張って生きて欲しい

ご縁があって今日ここにお集まりいただいて私の話をお聞きくださったみなさまもお考えいただいて、特に被爆2世・3世の方というのは、いろいろご心配もあろうかと思うのですが、でもみんなで力をあわせれば、乗り切れると思いますし、人間の命と言うのは大事でございます。



被爆者同士が結婚したらね、障害児が生まれるかも分らんから子どもは産まない約束で結婚したのが実は私なのです。ところがそれを一人の近所の先生が「あんたら結婚して7年も子を持たんけど、産まんのんか、産めんのんか」とおっしゃったのですよ。実はこうこうでね、二人とも被爆者だし、産まない約束で結婚したのです、

と言いましたら、「馬鹿めが」と怒られたのですよ。「何を言ってるのだ。あんたたちの心の中に障害を持った子に対する、障害者に対する差別意識があるんだろう。だから障害児を産んだら怖いと思って産まん約束なんかしやがったんだ」と言われたのですよ。まさにそうですから、私にはグサッと来ました。主人もグサッと来たみたいでした。そして、「命言うのはなあ、障害があろうがなかろうが、どうであろうが、もう値打ちは一緒なんじゃ。それは大事な大事な命なんやから、そんなことで産むの産まんの勝手なことを言うな」と言われて、もう本当に目から鱗と言うか、頭を金づちでぶん殴られたというか、すごい衝撃でしたね。それで間違っていたわ、ということになって、子どもを作るまいという約束は止めました。結婚後8年目にして女の子を授かり、それからまた何年かして男の子を授かり、2人の子どもに恵まれて、それぞれがまた結婚して今孫が5人おります。ひ孫が1人おります。

あの先生の一喝がなかったら、あんたたち生まれていないんだからね、って言うのですよ。それでね、その先生は割とご長命でいらしたのですが、孫たちにね、あんたたちこの先生の方に足向けて寝てはいけんよ、あの先生のおかげであんたたち生まれたんだからね、って言ったら、ええ、そうなの、って言ってましたけど。

本当に私は、2世・3世の方には特に申し上げたいのですが、そのことを恐れて命を後に繋ぐことを止めるなんてことは絶対になさらないで欲しいの。もう正々堂々と胸を張って、被爆2世である、3世であることを、何にも恥ずかしいことではないし、引け目に思うこともないし、大きな顔をして堂々と生きて欲しいのですよ。堂々と命を繋いで行って欲しいの。私は「2世・3世の会」の方がね、京都によんで下さると聞いてね、このことだけは言うとおこうと思って来ました。

人権とか命とか大事に大事になどと言うけれど、でも自分たちが被爆2世・3世であることを恐れて、命を繋いでいくことをね、止めてしまうことなんて、それこそ止めて下さい。正々堂々と、胸を張って、強く、凜として生きて行って欲しいと思っております。もう大威張りで生きて行って欲しいと思うのですよ。

いまだに被爆者差別みたいなものが日本にはあるのですが、私の娘に「お母さんが被爆証言なんかしているから、あんた大きくなって結婚するときに嫁入り傷になるから、お母さんに被爆証言止めてもらえ、と言う人がいるのだけど、あんたどう思う？」と聞いたら、娘が言いました。「お母さん、私はそんなことで差別してね、結婚は嫌だなんて人のところには絶対に行かないから心配しないで」と、そう言いました。「そいじゃ、お母さん証言活動続けてもいいよね」と言うと、「それは是非やって頂戴」と言ってくれたので、もう安心したのですが、娘の連れ合いもそれをちゃんと分かってくれて、結婚してくれました。彼は「お義母さん、僕はね、引け目になんて思っていないよ、誇りに思いこそすれ」と言ってくれたので、堂々と生きてきた甲斐があったかなと思っています。

だけど今も、広島にもね、被爆2世であること、3世であることを隠していらっしゃる方もおられるのですよ。そのことがばれたら困るから、原爆手帳とらない方もいらっしゃる。私はそれは違うと思うのですよ。そのことを引け目に思うというのは、人権を踏みにじっていることになると思います。

人間の尊厳さ、命の大事さ、それを思えば思うほど、私は被爆2世・3世の方は胸を張って生きていただきたい、そう思っております。

今日はありがとうございました。

(なお全文が読みたい方は京都「被爆2世3世の会」ホームページの「私の被爆体験」の項目をクリックし「被爆体験の継承76」をご覧ください。)

以下の欄は、お差し支えのない範囲でご記入下さい。

また、今回のアンケート結果をまとめた資料は、ご希望の方にお届けします。ご希望の有無をお願いいたします。

名前	(ふりがな)
住所	〒
電話番号	(FAX可/不可)
Eメール	
アンケート結果の資料の希望	有 ・ 無